

テーヌの英文学観

白 田 昭

はじめに

テーヌの『英文学史』(*Histoire de la Littérature Anglaise*)を論じるとなると、だれしもまず考えることは、彼の方法論、いわゆる *race, milieu, moment* の三要素でもって、文学史の諸現象を説明することの是非であるが、もはやこの問題についてとやかく言う必要はないであろう。このテーヌの理論の評価は、あらかじめ定まったものようであるし、エンスカン(Emile Hennequin)を中心とする諸家の批評は、矢野峰人博士の『文学史の研究』に詳しく述べられているからである。しかし、その方法論がいささか時代遅れになった嫌いがあるからといって、すぐにテーヌの英文学批評が無価値なものであるということには、もちろんならないであろう。後の世代に対して、文学史の体系的説明の可能性を示唆したという功績は大きいし、いかに偏見を含んだものとはいえ、彼の英文学観には、かなり意味深い洞察があると信じて、以下にその所説を要約してみた次第である。

* * * *

英民族の特性を説明しようと試みるとき、もっとも要領を得た、かつまたもっとも常套の手段は、英民族の文化や趣味を、フランス人のそれと比較することである。このやり方はとくにフランス人の好んで用いるものであるが、テーヌもその例にもれず、しばしばこれに頼り、五巻にわたるその『英文学史』において、冒頭のサクソン民族とラテン系民族との比較から始まって、最後のテニソンとミュッセの対比にいたるまで、また彼の『英国雑記』(*Notes sur L'Angleterre*)においても、フランス文化との対比を足がかりとして、英国文化の特徴を説明している。

優雅さはフランスの民族的財産であり、これは不釣合を嫌う、生来の繊細さから生まれるものである。フランス人の本能は、芸術においても、また議論においても、相手に烈しい衝撃を与えることを避けようとし、自分の感情や思想の調和を計ろうとする。なにごとにかけても、彼らは節度、中庸を重んじ、きわめて洗練されている。彼らは、穏和で、本来的に文化的であり、粗野な官能に傾くことなく、落ちついた会話を愛好し、洗練と趣味の上品さのために、卑猥に陥ることもない。フランス精神は、フランスのぶどう酒のごとく、人を獣的にすることがない。と、これだけ聞いていると、まったくフランス人が理想的人種であるような印象を受けるが、そのことの当否はしばらく措くとして、テーヌのいうところでは、英国人とは、この逆のものらしいのである。

まず問題になるのは、Restoration と、それに続く古典主義の時代であるが、これは欧州的

風潮のおもむくまま、英国も、何ごとにつけ、フランスに範をとろうとした時代であった。しかし、英国の場合、その民族性のしからしめるところ、フランス的規範から逸脱するところが多かった。この規範逸脱のあとを辿れば、英国の民族性の特徴が知れるとするのがテーヌの論である。まず Restoration の劇作家達をとって見た場合、モリエールにあっては、人間の真実の姿は、優雅な微笑のもとに隠されて描かれていたが、彼らにあっては、それが粗野な、露骨な手法でなされ、すれっからしの悪人が喜劇の主人公となるのである。これをたとえて言うならば、うす汚い人間が、そのうす汚い本性はそっちのけで、優雅になろうとし、下司人足の感情を、遊治郎の言葉で表現しようとしたもので、この一派の頭領ウィッチャレーは、川っぶちで一所懸命に身づくろいするたちのようなものなのである。

いかにフランス的な軽快さをよそおうとも、その本性よりする、粗野、卑俗、鈍重などの欠陥はいかんともしがたく、彼らにおいて見るべきものは、人間とか感情についての一般的概念の提示ではなく、ある情景における人物の動作や身振りなど、個々の、現実の場における人間の姿や感情を、如実に把握し、それを具体的に舞台の上に再現するという、極めて力強いリアリズムの才能だけである。

さて、人間や、その感情についての一般的概念というのは、これは総括的、抽象的なものであり、個々の、現実の場におけるその把握と再現は、対照的に、はなはだ具体的、個的なものである。昔から言い古されたことながら、前者の態度はフランス的で、後者の態度はイギリス的である。フランス人が、野心、怒り、愛情といった感情の一般的形態を見、幸福、貪欲、愚かしさといった、人間の抽象的な状態を見る場合にも、それらの感情や状態を具有する、個々の、現実の人間から、それらの感情や状態を抽象して考えられないのがイギリス人である。イギリス人にとっては、それらのものは、遺伝、気質、環境、教育によって、まったく独自の、移譲しがたい形態で、個々の人間に植えつけられている特質なのである。そしてイギリス人は、いかなる場合においても、まず一番に、この個人の特質に目をつけ、けっしてこれから目を離すことができない。こういった抽象よりも具体を、観念よりも事実を重視し、これにひかれるという、きわめて強力な即物精神 (esprit positif) が、イギリス人の特質の corner stone を形成しているのであり、文学にあっては、これが、全体の調和とか形式を破ってまでも、即物的な、変化に富む描写を促すといえよう。そしてそのもっとも明らかな例は、バトラーの『ヒューディブラス』、スターンの『トリストラム・シャンディー』などに見られ、これを一語に評するならば、奇矯というべきであろう。この強い即物的な想像力に由来する奇矯さのゆえに、中庸穏和な概括論を旨とする古典主義の美しい衣は、イギリス人の身に合わず、所々方々にその綻びが目立つのである。

ここで、われわれはこの即物精神の由来を考えてみなければならない。テーヌはその得意の人種と環境の説をもち出して来る。北の国、霧と霜と雨と嵐のなか、沼地や森に建てた、泥作りの小屋に住み、日がな一日、暗澹たる空を見上げ、榎の葉にしたたる雨だれの音を聞く野蛮人にとって、甘美な夢想、洗練された、敏活な思考の余裕が、どこにあったらうか。彼らのな

す、まず最初の努力は、この荒涼たる、非友好的な気候風土と闘い、そこにできるだけ個人の福祉 (bien-être privé) を見出すことに注がれた。次には、ノルマンの征服によって、被征服民族の位置におかれた彼らは、あらゆる可能な手段を用いて、民族保全を計り、最大限の公的福祉 (bien-être public) を得ようと努力した。こういった努力は、なによりもまず、即物的、具体的なものであった。フランスに伝承された『狐物語』 (*Roman de Renart*) では、人間社会が動物の世界に見立てられ、そこで狐が、洗練された策略と奸智によって、裏手からのゲリラ作戦を行なうのに対して、ロビン・フッドの物語では、たくましいからだの男たちが、堂々と、正面きって、正攻法的な、力と力の対決で、自由と独立を擁護しようとするのである。チャーサーの『キャンタベリー物語』に出て来る地主 (Franklin) は、「焼肉焼魚の切れたことのない、四六時中いつも食事の準備のできた」家に住んで、栄養満点のからだをしている。このような男が治安判事なら、さぞや線の太い、即物的、具体的な裁判をしたことだろうし、このような肉体力もあり、具体的な考え方の人間を相手にしては、さぞや当時のノルマンの支配者たちも、手を焼いたであろうことは、想像にかたくない。

それでは、この即物精神は、思想上の問題では、どのような作用を生むことだろうか。また陳腐な英仏比較論を引き出すことになるが、フランス人は、あらゆる著作、あらゆる事物に、心地よい形式 (*forme agréable*) を要求するが、イギリス人は有用な実質 (*fond utile*) に満足する。フランス人は、観念それ自体をそれ自体のゆえに愛するが、イギリス人にとっては、観念はつねに記憶術と先見の手段にすぎない。彼らにとっては、樹木は果実によって、思索は実践によって、その価値を判断さるべきもので、真理も有用なる応用があってはじめて価値をもち、応用可能な真理の域を超えれば、そこには空しい妄想しか存在し得ないのである。こうなってくると、宗教は行為の問題となり、神学はもっぱら護教論に熱中し、哲学は人間経験の整理の問題となる。はたして、英国では、宗教は、信仰や教義の問題よりも、行為、道徳の陶冶にその主力を注ぎ、哲学は、ベーコン、ホブズ、ロック、ミルと、経験論に終始して、純粹哲学としての *metaphysics* は存在しないのである。

文学においても、いかにこの実証的即物精神の災いが大きいことか。イギリス最大の詩人の一人と目されるミルトンをとってみよう。その『失樂園』については、テームはこう論じている。神と天国と地獄を描くということは、忘我法悦の境にはいつてのみ、なし得られることである。しかるにミルトンは、天使たちの武功を、クロムウェルのそれのように描き、人間を描くことに終始している。創造後間もない楽園に立つ、アダムとエヴァは、十七世紀ロンドンの清教徒の夫婦にすぎず、アダムは日常茶飯のことについて、実利的な教訓をエヴァに垂れるのであり、彼らが裸体であるので、こっちは目のやり場に困るほどだ。そしてまた、God は当時の King であり、セイタンは、王に反抗して立ち上がったピューリタンの領袖である。こういった描写は、おぼろな光がとけ合い、神秘的な輝きが天空に見え隠れする、ダンテの『神曲』の幻想から、いかに遠いことか。ダンテの世界は、地上の生活の法則からへだたること遠いものであるが、ミルトンは、四角四面な論理で理屈立てをするにすぎず、彼の描いた天上界

では、万事において人間の法則が通用しており、それは散文精神の横溢した、即物的な世界である。

アディソン、ポープ、スウィフトに関しても同様である。アディソンの場合、その人となりからしても、またその平明な文体からしても、都雅な古典主義的理想に近づいているけれども、たとえば『スペクテーター』に出た伊達男の脳の解剖の話など、彼の想像はあまりにも即物的で、重苦しく、けっして軽快といえたものではない。ポープは詩人 (Poète) ではなく、職人 (homme de métier) だったと考えるテーヌの説には、いささかロマンティックな偏見が感じられるが、ひとまずこのテーヌの説に従うと、ポープは、自然の诗情もなく、ただ人工的に、形式の都雅端正をねらって、小手先の技巧を弄した詩人であったが、そのポープでさえ、ひとたび憎しみの感情にかられると、平常の古典的端正、よそおった優雅さをかなぐり捨て、『愚物列伝』(Dunciad) においては、グロテスクなまでに即物的な描写を重ねて行く。イギリス人には、われわれフランス人の優しさ、洗練はわからない。彼らは、表現力豊かな具体的事物が、ひしめき合って、眼前を通り過ぎて行くのを見たく思うのである。ゲイなどにもひとしく見られるこの傾向は、スウィフトに至って、その極に達する。リリパットやブロップディングナグでの、ガリヴァーのからだと同様の事物の寸法の釣合いが正確であることは、よく述べられるが、ヤフーの住むフーインムスの国の描写となると、その具体性にへどの出そうな思いを禁じ得ないのである。さらには、デフォー、スモレット、リチャードソン、ジョンソン、ホガース、これらの人々の努力は、すべて、野蛮、獣的なイギリス人の日常生活に必要な道徳を教えるものであった。ジョンソンの『エッセイ』を読む場合、われわれフランス人は、あくびを禁じ得ない。彼の説く真理は、あまりにも真実すぎ、みなわれわれの先刻承知のことばかりである。しかし、イギリス人にとっては、その説くことが卑近なものであっても、それは問題ではない。パンと肉が卑近なものであっても、けっこううまいことに変わらないのと同様である。こういう意味で、ジョンソンの『エッセイ』は、イギリス人にとっては、国民的な食物といえるだろう。

時代は下がって、スコットは歴史小説を試みたが、これは失敗だった。なぜならば、彼は舞台装置、しかもそのほんの一部、小道具のあたりに中世を再現しているとしても、けっして中世の魂のなかにはいることはできず、彼の描いたものは、現代人の言葉を語る、現代の人間にすぎないからである。この失敗は、けっしてスコット一人にとどまるものでなく、歴史小説というジャンル自体が、イギリス人には不向きだったのだ。真の歴史家となるためには、自分の現在属している文明にとらわれてはならず、自分の研究する過去のなかに、自分の故郷を見出すようにならなければならない。ところが、イギリス人は、自分の国、自分の時代を最上のものと信ずる島国根性をもっており、さらには、目の前の現実から目を離して過去を眺める、ということができない。彼らはあまりにも綿密な現実主義者、あまりにもはっきりした道徳主義者であったから、歴史の門を開いて、過去の国にはいるために必要な、大きな洞察力と同情というものをもち合わせず、彼らにとっては、歴史は現在の立場からの過去の批判となり、歴史

小説は成立せず、当世の風俗小説がそのかわりに流行したのである。そしてテーヌは、この風俗小説と、現代意識に立脚した歴史家の例として、それぞれサッカーとマコーレーをあげるのである。

まずサッカーであるが、テーヌは、小説家とは、まず第一に事物それ自体を、無私な立場から描写すべきであり、対象全体をあるがままに、非難することなく、罰することなく、また任意の選択などによって、全体をそこねることなく提示すべきであり、対象の価値判断は、これはそっくり読者にまかせるべきものであるとの前提に立っている。ところがサッカーは、諷刺を武器とした。諷刺というものは、事物自体をあるがままに眺めようとするのではなくて、前提として価値判断（とくに道徳的価値判断）を含む態度である。諷刺がはいってくれば、それだけ、冷静公平な芸術の地歩は失われる。諷刺は、人間の悪徳を摘発し、攻撃するが、人間の悪徳や美徳は、人間の本質ではなくして、その属性である。、人間を非難し、あるいは賞讃しても、人間を知ったことにはならない。このように、物の本質を知ろうとせず、急いで、その現象的な属性の価値判断に赴く、これがイギリス人の実利性の現われなのだ。

マコーレーの場合、イギリス人は、具体的、実践的であるから、その要求に応ずべく、彼の人物論も、道徳的な価値判断に終止している。自分が論じる人物の廉直さ、よこしまさの度合いを計るということが、彼にとっては重要な問題で、それにすべてを集中し、いついかなる場合にあっても、彼は、正当化し、弁護し、罪を宣告することのみにかかずらっている。マコーレーは、きわめて明晰で、形式（forme）を重んじ、一見フランス的に見えるが、このように、個々の歴史的事実の記述にあたっては、その記述自体よりも、現在という立場からしての、過去の事実の価値や善悪に関心を注いでおり、自分の所説を述べる場合、現実卑近な現象との比較によりかかって読者に訴え、ひとつの事件を描写するのに、附随的な、その周囲の細かな事物の記述を忘れないところなど、やはりフランス的な快活さ（allégresse）や活潑さ（vivacité）に欠け、いささか重苦しく（un peu lourd）、あまりにも事に夢中になりすぎる（trop acharné）、イギリス人の特性をよく示している。

最後に問題になるのは、ジョン・ステュアート・ミルである。すでに述べたように、ミルは英国経験主義哲学の伝統を踏む人間であった。われわれにとって、存在とは、現象の集積、属性の総計にすぎない。存在を認識し、事物の法則を知るのは、われわれの経験を通じてのみ可能である。かくして、事物の生成を支配する因果の法則を、歩一步一步と経験を足場に辿っていくとき、われわれは、最初の原因がどうして存在したのかという問題に突き当たるが、この場合、それはただ偶然に存在したと仮定するより仕方がなく、われわれの経験の埒内では、きわめて齊一に作用しているように見える因果の法則も、これはわれわれの経験の埒内においてのみ通用するものであって、宇宙のうち、われわれの確実な観察の及ばぬ部分については、理屈にかなったという程度の推測としてしか価値がない。要するにわれわれに確かなことと言いつけるのは、自分の目で見、手でさわってみられる範囲のことにとどまり、それ以上は闇であり、空白なのだ。

われわれの経験という小さな世界の外に、この大きな、空白の、未知の世界を、みずから進んで許容する、このようなミルの理論は、じつに的確にイギリス人の精神態度を表わしている。熱っぽい考え方の人間や、敏感な良心の持ち主は、この未知の世界に、自分たちの夢想のすべてを投入して、そこに具体的な神を描き出すであろうし、冷やかな判断をなす人間は、その世界の探究を諦めて、現実の世界の改善に、全精力を集中することとなる。このようにして、イギリス人の精神のなかには、即物精神と宗教精神 (esprit religieux) が並存しているのであるが、彼らは、可能なる限り、即物精神を働かせ、それで押せないところでは、きわめて強い、茫漠たる彼岸の意識 (sentiment du au delà) や崇高感 (sentiment du sublime) を働かせる。だから、イギリス人のピューリタニズムというのは、実証的精神の上にのった宗教感情の所産で、これもまたイギリス人の即物性のしからしめるものといえるだろう。

このように、テースは、イギリス人の即物的実証精神を指摘するが、しかし彼はまた、これがイギリス人の資産のひとつであることを忘れてはいなかった。いちのごとしとの酷評を加えたウィッチャレーの場合でさえ、場面場面を目の前にまざまざと表現する、彼の力強い筆力というものを、テースが高く買っていたことはすでに述べた。いかにその描写が怪奇醜悪であるとしても、スウィフトの力と独創性は、いかなる人も否定できないものであろうし、アディソンが、まったく微温的な古典主義のなかに溺れきることなく、後世になんらかの遺産を残したとするならば、それは彼の想像力の生んだ、ロジャー・デ・カヴァレーなどの人物であるだろう。このような現実感に富んだ人物描写の例は、英文学においては、ほとんど枚挙にいとまがないが、この想像力の強さにも見られるように、即物的な性向を土台にした、内的感情の強さ、これが英文学の強みなのである。

もう一度サクソンの昔に帰ってみよう。みごとに彫琢された形式、端正端麗な輪郭というものと、およそ縁遠かったこの民族も、その混沌とした夢想のなかに、つねに、崇高なるもの、荘厳なるものについての意識を強く抱いていた。そして、この意識は、なめらかな表現の道を得ないままに、心のなかに凝縮され、積み重ねられていった。彼らは神を、強く、具体的に意識した。そして、彼らは、芸術的で、饒舌な民族のように、その意識を、美しい、心地よい物語でおきかえることをしなかった。サクソン民族は、ヨーロッパの全民族中、もっともヘブライ族に近かったといえるだろう。この伝統を汲むイギリス人のヘブライ性は明らかで、テースは、ミルトンをケドモン (Caedmon) と比較し、彼をヘブライの予言者の子孫、最後のスカンディナヴィア詩人と呼ぶのである。

思惟ではなく、具体的想像に支えられた、この内的感情の強さが、英文学の強みであるとは、先にも述べたが、その例をいくつか挙げてみよう。シェークスピアの文体は、とほうもない誇張、呼びかけ、絶叫、思想の混乱、積み重なる心象の減多やたら羅列であって、まさにこれは狂気のスタイルである。だが彼がこのように語ったからといって、それは、無理にそうしたことではなく、必要にかられたことなのである。彼は、事物をまったくそんなふうに見ていたのだ。これが彼の思考の形式だったのだ。シェークスピアは、けっして事物を冷静に見ては

いなかった。彼の精神の全機能は、眼前の心象や観念に集中されており、彼はそれに埋まり、没頭していたのだ。逆巻く天才の波が押し寄せ、ぶつかって、ありとあらゆる対象を呑み込んでしまうのである。テースはさらに論を進めて、シェークスピアをコルネイユと比較する。もしシェークスピアがコルネイユのなかにも出て来そうな、heroic な人物に出くわしたとしたら、コルネイユが heroism として説明したであろうことを、彼は passion ということの説明し、名誉欲の烈しさと食欲さを描いたことだろう。シェークスピアの特長は、コルネイユの場合と違って、抑制による nobleness ではなく、その熱情的な想像力 (imagination passionée) にあるのである。

散文的な理屈に終始して、超自然の世界を人間の世界に模して描いたにすぎない『失樂園』のなかでも、ただ一人光彩を放っているのは、セイトンの姿である。その豪胆さ、粘り強さ、刺すような皮肉、あたかも愛するがごとくに苦しみを抱きしめる自尊心、屈することを知らぬ勇氣、こういった激情と、さらには、その激情をみずからのうちに矯める自制力、セイトンはチャールズ二世王を頭とした当時の世間に反抗する、敗れたピューリタンたちの姿であり、これをかくも如実に、迫力をもって描き得たのは、ミルトンの心の感情の強さであり、それが英国民、ひいては英文学の力なのだ。

さらに下って、ドライデンは、戯曲において、フランス風を重視し、できるだけこれをイギリスに導入しようとしたが、やはり彼も、英国劇古来の伝統たる、劇的事件の豊富さ、筋の多様性、予想外の事件や血なまぐさい、また烈しい所作の身体的表現などを、捨てがたく思って、これを保存しようとした。そして、古典劇の見地からすれば、このドライデンの試みは、フランス風の均斉とイギリス流の奇矯との間に立ち迷って、結局失敗したといわざるを得ないのであるが、ドライデンの失敗例は、逆にいうならば、いかに英国の想像的な感情の力が強かったかを実証しているといえるだろう。そしてまた、彼の論争詩について見た場合、修辞術やスタイルの按配など、些細な技巧を超越した、彼の心の真摯さ、激しさ、押し寄せる大波のような力をもった議論、これはやはり、彼の人物がいかに大きかったかを示している。この民族の心には、真摯さ、激しさの土台があり、そこでは憎しみも、まったく悲劇的なものとなって、北国の嵐の海のごとく、陰鬱なる光彩を放って、わきかえるのである。

スウィフトの迫力、シェークスピアの狂熱、ミルトンの反抗精神、ドライデンの重厚さ、これらのものの集まり、至る先が、バイロンである。テースは、バイロンを目して、浪漫主義最大の詩人となし、彼からは、他のすべての詩人たちからよりも、その国とその時代についての、より多くの真理が学ばれると考える。激しい想像力、不屈の自尊心、冒険心、闘争欲、破滅に向かって突進するような内心の高揚、陰鬱な風土と気質から生まれた、こういったバイロンの反抗精神は、雷鳴の夜、嵐の海に向かって、無蓋の丸木舟を乗り出す北欧の狂戦士バーサーカを思わせるものがある。この本能がイギリス人の血のなかにあり、彼らはこのように生まれついたのだ。まったく北欧的な、異様な詩、その根はエッダ (Edda) にあり、かつてシェークスピアの狂熱に花を開いたこの詩は、あまりにも意志強固、あまりにも陰鬱な民族の心のなか

に生まれ、嵐の海のほとり、きびしい風土のなかで育てられ、荒涼と雄壮の心象をぶちまけたのち、宇宙万物の上に、世界の破滅の幻想を、黒いペールのように投げかけて終わるのである。バイロンもまた、彼らと同じく、優美な感情を知らず、苦悩に耐え、危険を冒し、抵抗を打ち破り、辛酸を嘗めるといった、闘争的な不幸のなかに、偉大な悲しみ、雄大な感情を味わうのである。要するに、バイロンは、海賊の頭領として、中世に住んでいたほうが似つかわしかった。彼の詩は、スカンディナヴィアの scald のそれであって、常識的な近代の世界に移されては、行ない澄ました世人の扱いに窮するものなのだ。

バイロンについては、その歌うところのものが、狭い、独尊的な自我の表現に終わり、普遍的な、広い洞察を与えるものでなく、あまりにも強いエゴティズムが、その限界であったとか、さらには、バイロンの手法は、メロドラマ的で、卑俗である。俗衆をひきつけようとすれば、嵐と難破、攻城戦、殺戮と格闘など、舞台装置をそろえて、大声で叫ぶのが、一番たしかな方法であるなどといった批判をなすこともできるだろう。たしかに、こういったところが、バイロンの欠点であろうが、しかし、その欠点を補ってあまりあるのは、彼の迫力である。バイロンは、けっして詩句の効果をねらって、これらを按配したのではない。彼は、自分が実際に生活した情景を描き、自分の胸に経験した感情を吐露したのだ。自我、不屈の自我、悪魔にも人間にも、何ものにも支配されぬ自我、顛落したる神のごとき自我、これがバイロンの、またこの民族の真情なのだ。

と、このようにバイロン礼讃はえんえんとして続き、テームはバイロンを、英文学中、シェークスピアとならぶ最大の詩人とするのである。これまで述べてきたことでも、おおよその察しがつくのであるが、テームは、英民族を、本質的には、未開、野蛮の民族と観じているのである。イギリスの風土を論じて、彼は、ここに住むのは、墓のなかで暮らすのと同じことである、と言っている。もし家のなかで、からだを使わずにじっとしておれば、人間は、心をむしばむ妄想にとりつかれ、自殺に赴くだけである。外へ出るということは、努力し、湿気と寒さをもものともせず、困苦を冒すことである。このような風土は、行動を課し、怠惰を禁じ、精力を刺戟し、忍耐を教える。したがって、イギリス人のなかには、奮闘努力の本能が生まれ、意志はきわめて強固になる。テームは、イギリス人のことを評する場合、牡牛 (taureau anglais) ということばを用いており、『英国雑記』のなかでは、イギリス人の特徴を、第一にからだが大いこと、第二には、気質がフレグマティックで、内攻的で、その思想表現がごつごつしている (saccadé) こと、最後に、活動的、精力的で、企業心があり、忍耐と頑張りに富む努力家 (travailleur) であることだとしている。またテームは、別のところで、こういったイギリス人の特色は、ジョンソン博士によく現われているのであって、彼がフランスに渡って、当時の優雅な哲学と享乐的な作法の行なわれたサロンに立っているさまを想像してみた場合、この対照のはなはだしさほどに、英国民族の特色をはっきりと示すものはないだろうと論じている。

ビフテキとエールに養われた大きなからだ、そのなかに秘められた強い獣性、これを陶冶す

るには、なまじっかなことでは間に合わない。ただ、激しい労働と努力、きびしい宗教と道徳、これらのものの形成する強固な堤防のみが、この獣性の氾濫を抑えることができるのである。そしてこの獣性は、精神的な面においては、熱烈な内的感情となって現われているのであって、英民族の精神史、英文学の歴史は、この強烈な内的感情を根本として、それに規制を加えようとする努力と、またその規制に反抗し、その規制を破って溢れ出ようとする感情と、この二つのものの相剋の歴史とすることができるだろう。

だいたい以上のようなものが、英文学について、テームのいわんとするところかと察せられるのであるが、英文学の特長として、精力と即物精神という、この二つのものをテームが挙げたのは、まったく正しいし、テームが否定的、消極的な意味合いに用いている、この即物精神も、肯定的、積極的に表現すれば、正直さということになるのであって、マシュー・アーノルドの、「好意的、肯定的に見た場合、英文学の特徴は、精力と正直さである」(*Essays in Criticism; Influence of Academies*) という言葉も、その正しさを裏書きしているといえるだろう。しかし、この点においてはテームが正しかったとはいえ、彼にはなにかの見落としがあったように思われるのである。テームの心中にあった英文学のイメージは、どうやら荒涼たる自然、いわゆる *nature sauvage* のなかにあつて、未開民族の名残りをとどめた英民族が、その心中の、嵐のような感情を絶叫する姿といったものらしく、このイメージに一番ぴったり合ったものが、英文学中の最高のものということになるのである。かくしてバイロンは、非常に高い地位を得、バイロンに与えられたスペースは、84ページに及ぶもので、シェークスピアの113ページに次いで、彼の『英文学史』中もっとも大きく、またバイロンと同時代、浪漫主義復興の詩人たちは、総からげで、30ページを割り当てられているだけであるから、これからしても、いかにテームがバイロンを重視したかがよくわかる。そしてまた、このように、不当にといえるほどバイロンを重んじたことにこそ、テーム批判の根本的な手がかりが存するといえるだろう。

テームは、*energy* と *force* とを、英文学の長所と考えていたが、彼は、細かな、詩的な鑑賞眼において、いささか欠けるところがあったのではないかと思われる。バイロンには、たしかにテームのいうような、狂熱と雄弁があり、迫力があるが、詩とは、はたしてそれだけのものなのであろうか。エドモン・シェレル (Edmond Schérer) は、テームの『英文学史』中、バイロンを論じたくだりをこう批評している。「実のところ、バイロンの才は、詩的というよりも、雄弁のものであり、彼にあつては、想像力よりも修辞術の占める割合のほうが大きかった。バイロンというと、わたしはいつも、スタール夫人について、シラーのなした、こういう批評を思い出すのである。シラーはゲーテにこう書き送っている。『われわれの考えているような詩的感受性は、彼女にはまったく欠けている。だから、その種の作品においては、彼女は、激情的な、雄弁な、概括的な面しか、感得できないのである』と。いみじくも言ったものだ。実際、雄弁と詩とを混同するようなことがあつてはならないのである……バイロンの嵐のごとき魂についての、雄弁なテーム氏の記述を何度読んでも、そのたびに、わたしは、次の

ような шамフォール (Chamfort) の言葉を、彼の耳にささやきたくなるのである。『だいたいなことは、何ものにもだまされないとことだ』 (Etudes sur la Littérature Contemporaine. Vol. VI p. 132-4)。

マシュー・アーノルドは、英文学の長所は、ケルトの遺産によるところ多いとなし、その例として、style と、詩における Titanism と、magic of nature、この三つのものを挙げている。テヌスは、このうちの Titanism を賞揚したけれども、「自然の魔法のような魅力を、すばらしいたくみさで表現する才能」と、アーノルドが評したものを、彼は、ほとんど英文学のなかに見ないのである。たしかに彼は、スペンサーをホーマーにも比肩すべき詩人と称し、その『仙女王』においては、異教の世界とキリスト教的な騎士道の世界の融合がみごとに成功し、そこには、アレゴリーと道徳性の重荷にも負けぬだけの、空想の翼にのった絵画的な性質がある、スペンサーは、全体の調和、美の概念をもった詩人であって、彼にあっては、北方の想像力と南方の forme の意識という、二つの極が、理想的形態で融和されている、と、言葉を極めてこれを推賞しているが、これもスペンサーの、肉眼に訴えるような、いささかあぶな画的な voluptuousness にひかれてのことだったように思われるのである。それはともかく、浪漫主義復興第二世代の三人の詩人のうち、バイロンを論ずるに84ページ、シェレーに7ページを当て、キーツにいたっては、わずかにその名が一度出て来るだけであるということを考えてみる場合、全欧的流行だったバイロン崇拜熱の余波をまぬかれなかったという、やむを得ぬ時代的な誤差をテヌスに許容するとしても、上述のシェレルの説が納得されるのである。思想的主張の尖鋭さにかけては、シェレーに劣るとはいえ、natural magic という点については、シェークスピアとともにあると言われるキーツにとって、これはあまりに不当であり、この不当をあえてしたテヌスは、迫力とか、思想的尖鋭さとかいう、強い、積極的なものは把握し得たとしても、キーツの静かな官能性、アーノルドが fascinating felicity, perfection of loveliness と評したものを鑑賞理解する、細やかな心づかいに欠けていたと見るのが正しいのではあるまいか。

文芸復興期や王政復古期の風俗を説明するにあたって、彼の筆致はあまりにもセンセーショナルであるし、アーヴィング・バビットの指摘するように、文芸復興期を、ただ人間本性の完全にして、猛烈な expansion の時代だとのみ観じて、その時代がもつ Humanism の意義を見ようとしなないなど、民族というもののなかの vitality とか、energy というもののみを重視して、人間の精神作用など、もっと human なものへの感覚が欠けていたことは、争えないようである。このへんのことを、シェレルはつぎのように評している。「テヌス氏の文章を読むたびに、わたしは、しつこく、やかましい音を立てる、巨大な蒸気ハンマーを思い出す。こんなにひっきりなしに打たれては、鋼鉄も曲がり、成型されるだろう。読む人は、あらゆるものに力を感じる。だが、それとともに、つけ加えて言わなければならないのは、あまりの騒音のために、こっちの頭がボーッとなってしまい、金属のようにどっしりとして、光沢のある彼の文体も、ときには、その重さと硬さの幾分をも合わせもつということである」 (ibid. p. 135) 時代の思潮を大づかみに把握し、その理論的な体系づけには、屈強なる理性を示すテヌ

ヌも、いささか心の硬い人間ではなかったかという疑問をわれわれは禁じ得ないのである。

ヴァン・ティーゲム (Van Tieghem) が、その著 “*Le Prérromantisme*” のなかで論じていることであるが、浪漫主義の芽生えの時代にあっては、原始的な、あるいは野蛮な、少なくとも半未開の民族の詩のなかに、インスピレーションが求められ、人類の原始的な時代に真の詩が存在したと考えられた。だから、オシアンの歌は全欧的の流行を呼び、また旧約の文学的価値が、大いに再検討されるようになったのである。テームの英文学観も、未開時代の名残りをとどめた、北欧的な、そしてまた、欧州民族のなかで、気質上、もっともヘブライ的な、英民族の文学というものであって、それはきわめて romantic な bias をもったものだったといえるだろう。オシアンの歌と、「夜、墓のあいだに立って瞑想する田舎の牧師の姿」がかき立てた、全欧的な浪漫主義の嵐、もっと正確に言えば、その一局面たる primitivism は、ルソオからスタール夫人を経て、テームに至ったのであり、それは年を経て、移り変わり、人間現象一切を、科学的な統一的 formula に還元しようとする、一見きわめて非浪漫的な理論となったのであるが、これも、バビットが metaphysical illusion と評したごとく、逆説的に言って、はなはだロマンティックなものと言わなければならないだろう。